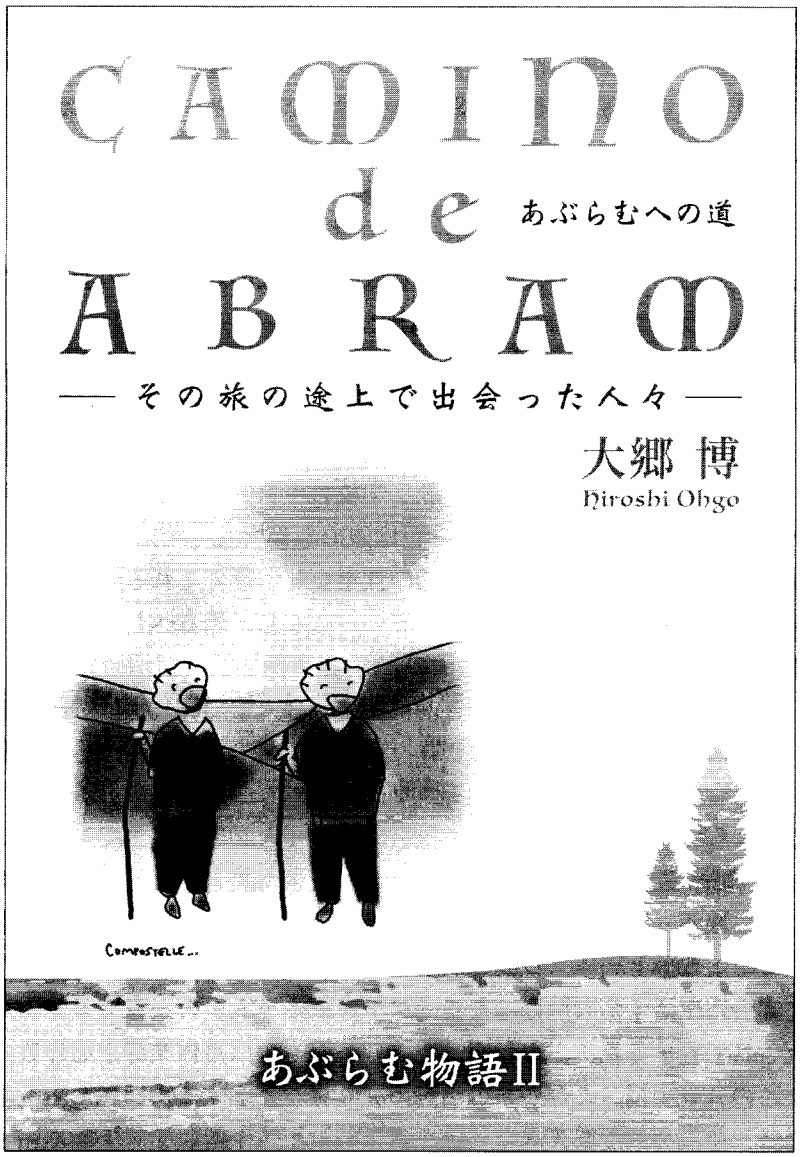
あぶらむ通信

第42号　2020年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL・FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



飛騨便り

コロナ、コロナの一年でしたが、時が来れば季節はめぐり晩秋そして初冬を迎えるころとなりました。

この未曾有のコロナ禍の中、皆様には大過なくお元気でお過ごしのこと願っています。

昨年の通信で里に育つ植物の異変に触れた。特に百年に一度という竹に花が咲いて枯れてしまったこと、何か悪いことが起こらなければと書いた一ヶ月後、全世界を一瞬にして変えてしまった新型コロナという大惨事がやってきた。

私が子どものころ、明治31年（1898年）生まれの父がよく「スペイン風邪」について話していた。何のことやらとぼんやりと聞いていたが、同じようなことが自分が生きている内に起こってしまった。スペイン風邪の大流行は1918～1920年というから「百年に一度」という公式がここにも出てくる。自然界の理方として全てのものが「より良く在るため」に百年単位で現状をリセットするという「摂理」というものが働くのだろうか。私個人の思いとしては、広島・長崎への原爆投下や東日本大震災の数々など人類の存亡に関わることがローカルなもの、特定地域の特定の人々の問題として他人事化の風潮にしてしまった中で、国境を越え全世界の人が直面する共通の問題、課題として共有できたということは大きな「天の声」と思っている。

○コロナ禍のあぶらむ

世の中こんなことになるとはツユ知らず、私は３年遅れのあぶらむの会創立30周年記念出版として「あぶらむ物語Ⅱ　CAMINO de ABRAM　あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―」の原稿書きに没頭していた。遅筆な私を天も後押ししようと思ったのか、この飛騨地開闢以来初めての全く雪なしの冬となった。「屋根の雪おろし」という言い訳を失った私は机に向かうしかなかった。５月、どうにか出版にこぎつけたら、コロナ禍が全世界を覆っていた。夏の里山自然学校や立教小学校のキャンプなど全てが中止やキャンセル、個人やグループで訪れる人もなく、あぶらむは陸の孤島と化してしまった。いつもならばウーファーなど海外ボランティアもいて季節の作業など助けてくれるのだがそれもなし。数十年ぶりの女房との二人生活はお互い調子の狂いっぱなし、恐るべしコロナでした。

そんな中で20年近く続いている地元高山のJA看護専門学校の宿泊研修は決行ということになった。しかしそのコロナ対策が大変、一部屋２～３人まで、食事は対面座禁止等どれもあぶらむの現状では対応できないものばかりだった。32名の学生の内、男子学生５名はボランティア達長期滞在者が生活する質素で小さな離れ小屋。そこが気に入ったらしく、コロナ対策などどこへやら、朝４時まで語り合ったという。また食事は室内で対応できないので野外のバーベキュー場、運悪くその日に初寒波到来。大きな焚き火をしながらも震えながらの食事、お互い心に残る一時となった。「豊かな自然の中で、今一時立ち止まり内なる自分との対話を重ねましょう」というスローガンを掲げこの場を提供してきたあぶらむだが、その対象者は主に都会に生活する人達だった。「ステイ・ホーム」の一言で多くのものが根底からひっくり返されてしまったあぶらむだった。残ったものは農作業等季節作業だけ、当分期間続きそうなこのコロナ禍、これからの活動の在り様をどうするか、私たちも重い課題が突き付けられた。

○あぶらむファミリーホーム設立のその後

養護教育を必要とする子ども達の家「ファミリー・ホーム（FH）」、設立手続きをしたのが2008年11月。その後提出書類の記載不備が指摘されたが県方側担当者の転属で棚上げ。本年度に入ってはコロナ騒動でそれどころじゃない状態。FH設立に必要な提出書類26項目、内14項目に不備有りとの連絡が届いたのは本年９月。メールの送信日付を見ると５月19日、その間４ヶ月近く迷子になっていたようです。

私の行政書類作成能力不足の問題が大なのだが、設立許可に至るまで２年間もの時間がかかると、この働きを支えるスタッフの事情が変化してきて支え手である人員を固定するのが難しいのです。

また、決して豊かではないあぶらむの諸事情、でも無い中で今あるものをつなげながら他にはないものをつくりあげて行うというあぶらむ側と、全てが完全に揃っていないとスタートさせないという行政側の考え、この隔たりがFH設立を困難にしていると思うのです。そうこうしている内に年が明ければ私も後期○○者に分類される始末、これからは自分の気力との闘いという厄介な課題も加わってくるのです。いやはや本当に厄介ですね…。でももうひと頑張り致します。

○あぶらむ物語Ⅱ　あぶらむへの道　出版

2017年、あぶらむの会創立30周年記念の年、今後後継者問題も含め会としての働きをどうしていくのか。また、大郷博個人としても72才、人生の最終章をどう生きるのか、私は長年あたためてきたスペイン、サンティアゴ巡礼の道800kmを歩くことにした。その時、私の心の中で不思議なことが起こった。巡礼初日、これからまさに歩き出そうとしていた時、私の先輩牧師でありよき理解者の一人だった河野裕道司祭の逝去の報が留守宅から入った。それが“呼び水”となったのか毎日のように、この世の旅路で出会った人々が心の中に出てきた。そしてそれらの人々との対話がはじまった。気がついたら800kmの巡礼の道を27日間で歩き終えていた。「そうだ！これまでの人生旅路で出会った人々のことを書こう！」。それはまた、それらの人々によって生かされ導かれてきたのだから「自分史」でもあった。

30年記念誌となる本の構想は巡礼の中で出来たのだが遅筆のため書き終えるのに３年の月日を要してしまった。コロナとタイミングを合わせたかのように出版された「CAMINO de ABRAM　あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―」も出版と同時にこの世の荒波に揉まれることとなった。 そんな中、青年時代を過ごした教会、渋谷聖ミカエル教会「ヒルダ・ミッシェル宣教支援基金」より出版費用の半額という多額な助成金をいただいたことは大きな大きな恵みだった。

自費出版のため一般書店にて販売することはできないが、多くの人々の口コミで広がり半年余りで１千冊近くお求めいただいている。女房が言うには「良いことをしてくれました。これであなたの葬式の時の挨拶が省けました。これを読んでください、全て書かれていますので！」。どうぞ読んでいただければ嬉しく思います。

○ブブの死と里の動物たち

あぶらむの宿を訪れて下さった皆さんにかわいがっていただいた“ブブ”が６月21日、15

年３ヶ月の生涯を閉じました。人間でいえば110～115才になるという獣医師の言葉に慰めを得ました。正確に言えば老犬ブブは覚悟の家出でした。１年ほど前より衰えが目立ちはじめ、ヘルニアのため後足が不自由になった。家の外で飼っていたためリードをはずすことにした。リードをはずしたらこれでやっと自由になったと言わんばかりに、上手に日陰を求め２ヶ月余りのびのびと過ごしていた。覚悟の家出の前日は全身が脱力し、地べたにゆったりとからだをあずけ、安らかに深い呼吸をしていた。とっても印象深い光景だった。夕食はきれいに何一つ残すことなく食べていた。そしてその翌朝姿が消えていた。

不自由な足なので遠くへは行けまいと思い、10人ほどで２日間この里の隅々まで探し回ったがどこにもその姿を見つけることはできなかった。こうしてブブは自然に還っていった。

ブブがいなくなったら急に野生の動物たちが里を徘徊しだした。狐、そして狸にいたっては一家５匹で堂々と。一番困ったことになったのは天然記念物のニホンカモシカが畑の野菜を食べだしたことである。宿を訪ねた人たちはカモシカを見ると大喜び、こちらはこちらで「あぶらむへ行けばカモシカに会える！」と宣伝材料になると思いカモシカのなすがままにしておいた。葉っぱを食べられてしまった大豆は実をつけることはなく、越冬に必要な白菜は40玉ほどきれいさっぱりと食べられてしまった。

あぶらむの畑で白菜を食べるカモシカ。
いつしかあぶらむ食堂というようになった。

これまでもカモシカはよく姿を見せてくれたが、堂々と野菜を食べるということはなかった。全てがブブの存在があってのこと、いなくなってはじめてあの子の役割に気づいた私だった。それにしても宣伝材料かはたまた生活防衛か、人間と他の動物との共存は奥の深いものがありますね。

さて末筆になりましたが、このブブを最もかわいがってもらった前田晃伸さん、あぶらむの理事としてだけではなく働き人として年間100日もここで生活を共にし、家裁少年達の話し相手や雑々とした季節の作業など10年以上にわたってあぶらむの働きを共に支えて下さったが、本年１月NHK会長に就任され、規定で全ての役職から離れなければならず、一般社団法人あぶらむの会の理事を辞退された。「ここで養った鋭気をエネルギーとしてもう一奉公致します」と淡々と新しい職務に向かって行かれた。前田さんの働きにこのあぶらむの里から心からのお礼とエールを送りたく思います。

こういうかたちでこのコロナ禍の一年が過ぎようとしています。「withコロナ」、これからどういう時代、どういう生活になるのでしょうか。どのようになろうともいつも前向きに生きたいものと願っています。どうぞお元気で、よいクリスマスをそしてよいお年をお迎え下さい。

2020年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

本年５月に出版された「CAMINO de ABRAM　あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―」、自主販売書籍として一般書店では取り扱ってもらえない本であるにもかかわらず、これまで1千冊ほど皆様の手にしていただくことができた。読後の感想を沢山いただきました。その一部を掲載させていただきます。

あぶらむの道を旅する人へ

鈴木　育三

筆無精な私は、久しぶりに大郷博君に電話を入れた。名を名のると「いくぞうさん」と、彼の元気な声が聞こえた。立教時代に大郷君の影響を大いに受けたA司祭の訃報を告げるためであったが、いつしか近況を確認し合うことになった。

最近、彼は自分が入る墓を造ったという。かつて沖縄キャンプで大郷博の寝ぼけ小便に立ち会った者としては、随分準備がいいなと思った。自費出版した著書を贈るという。数日後、分厚い書籍が届いた。封を開けると表題『CAMINO DE ABRAMU』が目に飛び込んできた。一瞬これは自伝小説かと思って読み進めると、脱藩浪人ならぬ脱藩司祭大郷博の一代記であった。

彼とほぼ同時代を過ごしてきた者として、この破格な人生史はどの場面にも等身大の大郷博が飛び出してきて、いつしか彼と一緒に人生の旅をしているかのように引き込まれてしまった。まことに爽快である。彼の人生で出会った一人ひとりが大変に魅力的である。その出会いは、時に涙をさそい、また思わず笑いがこみ上げる。彼は「人生の良き旅人は、良き旅人と出会う」と言う。まことにそのとおりだと思う。

それにしても何故、大郷博はEL Camino de Santiagoへ巡礼の旅に出かけたのであろう。義理人情に篤い彼のことだから、人生の旅路で出会ったあの人、この人と共にサンティヤゴへの道を歩き続けたのではないかと思えてならない。

彼の恩師でもあったヤコブ主教を病床訪問したとき、小生に「すべての役職を捨てて『サンティヤゴ・デ・コンポステラ』に旅をしたい」と語った言葉を想い起こした。巡礼の旅は、自分の魂に向き合う試練を象徴する「炉」“caminus”をも意味していると言われているように、旅の一歩一歩が魂を清めるという。

良い旅人づくりに励む大郷博は、これからも人生の途上で出会う一人ひとりの旅人に「Buen Camino!（よい人生の旅を！）」と、祝福の言葉を交わし会って旅を続けていくことだろう。

「コロナ禍の小春日和に読みふける　朋が記した『アブラムの道』」

榛名の里より感謝と愛を込めて
すずきいくぞう拝

『あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―』を読んで

「音吉伝」― 知られざる幕末の救世主 ―（新葉館出版）の著者　篠田　泰之

先日、拙書『音吉伝』を読んでいただきたく、岐阜県高山市国府町で「あぶらむの里」を主宰されている大郷師に持参しましたところ、「オレも自叙伝『あぶらむへの道』を発刊したから読んでくれ」と、結局互いの書を交換する形で戴いてきました。それを先日、漸くにして読み終えたのですが、心をリフレッシュするためにとても支えになる本だと思いますので、そばに置いて、さらに繰り返し読んでいこうと思っています。大郷師は、自叙伝の中で、歩んできた道を振りかえり、特に、ハンセン病の施設、沖縄愛楽園での青木恵哉師との巡り合いや、そこで明るく気丈に生きるタケおばさんなどの語り、フィリピンでのキャンプで出会ったヤマシタ・メレシオさんたちの日系二世の過酷な運命を背負った生い立ち、ネパールで結核予防にBCGを打ったら結核になってしまったその事情の話など、数多くの体験談を語っておられます。とてもわれわれが想像のつかない現場に立ち入られて、改めて大郷さんの人となりを窺がうこととなりました。著者大郷師を理解するのに、川上国府町（現岐阜県高山市国府）元町長とのやり取りが端的にそれを表しているようです。あぶらむの里の土地は町有地で、収得にあたっての代金 2,500万円、「ハイ、これから募金で集めます。」は、川上元町長に同情を禁じえないものです。この一連の川上町長とのやり取りから垣間見えるものは、これは一朝一夕になせる業ではなく、かつまた、誰にでもマネできるわけではない、大郷師の豪放磊落な人間的器を感じさせるくだりでした。

私がこの書と巡り合いありがたいと思ったことは、私は今まで『音吉伝』を認(したた)めるにあたって、大きな疑問を抱いていましたが、それを氷解するような文章をこの書から見出したことです。私の疑問とは、教育者メアリー夫人は、いかにしてアジアの地に足を踏み入れ、どのように音吉を真の国際人に導いたのであろうか、ということです。実際音吉は、大変身を遂げるのですから、この疑問はとても重要なことなのですその疑問の答えが次に紹介する一説ではなかったかと思うのです。それは、大郷師はこの書の中で、次のステップへ移るにあたって、決断をためらっていた時のことを、次のように述懐しておられます。「私の内に、二つの声が闘っていた。将来に安定を求め、自分の生涯を終わりまで見通してそれに保証を与えていこうという自分、他方、行先はどこか、どうなるかは分からないが神の呼びかけに従っていこうとする自分。」このくだりは、思えばわがメアリーも、大郷師と同じ葛藤を経験していたに違いありません。そして、大郷師は、その時、神の声として、これからの進路を決定したと記されています。「そんな時、創世記のアブラハムの旅立ちの物語は私を大きく揺さぶった『あなたは国を出て、親族に別れ父の家を離れて、私の示す地に行きなさい』。彼は行き先も知らず…」

恐らく、ギュツラフ夫人メアリーも、この言葉を胸に抱きアジアの地に至ったのではないか。はたまたそのアジアの地で、数奇な運命に翻弄された不思議な青年音吉と出会い、その言葉をかみしめるように音吉に授けたのではないかとイメージできるのです。大郷師は言います。「人生は出来事、ハプニングなのだ。」と、それに対して身をゆだねたアブラハムを「聖書は信仰の父とし、大いに祝福を与えている。」と解説しています。まさにこのアブラ

ハムが聞いた言葉こそ、あの時代、多くの宣教師がアジアを目指し、やがてその波が日本にもやって来ることとなったのではないかと。著者大郷師は、この言葉と改めて向き合い、以後、牧師の衣を脱ぎ、司祭の職を捨て、現在の「あぶらむの里」建設の為に職業訓練所に入り、一から技術と知識を培ったといいます。新卒の若者に交じって 40代のおっさんが職業訓練生として木工技術を身に付けるというのです。まさにその心意気は、この言葉に集約されているようです。私は、この一節に至って、まさに膝を打つ思いでした。

正直なところ戴いた本というのは、なかなか開きがたいものです。それがこちらは是非とも『音吉伝』を読んでいただきたいものですから「読んでいただけましたでしょうか。」と聞くためには、先ず先方の本を読まなければ、と読み始めたものです。読んでいるうちに、気が付けば、いつしか“大郷ワールド”に導かれていました。読み始めた動機はそんな打算的なことを打ち明けなければなりません。しかし、思ってみれば「これも何かのご縁、神様のお導きか」と実感したものです。

先日あぶらむの里を訪れた時、大郷師は弾んだ声で「自分の墓を建てたぞ」と、さらに「建ててみたら急に心が軽くなった」とも。大郷師は、その墓と、この一書を以て一期とされたのでしょうか。この書では、淡々といつもながらの大郷師ならではの歯切れのよい口調で語ってはおられますが、生前墓と共に、この書がこの世に落とした一粒の種の手引書となるよう思いを込められたのでしょうか…。

CAMINO de ABRAM（あぶらむへの道）を読んで

あぶらむの会 理事　山田　益男

実践教育活動「あぶらむの会」が発足30周年を迎え、記念出版として「あぶらむ物語Ⅱ CAMINO de ABRAM（あぶらむへの道）」を出版した。主催者である大郷博師が人生において出会った方々との出来事が紹介されている。「あぶらむの会」が発足するまで幼少時のことから立教大学チャプレンまでのあぶらむの会準備の期間のこと、多くの方々の支援と協力を得ながら出発したあぶらむの会創設期のこと、そしてあぶらむの会活動期のこと、更には将来の働きについての言及がある。

そもそも「アブラム」とは神より命名された信仰の父アブラハムの旧名であり、この会は神様からその存在にお墨付きを戴く前のアブラムの思い、立ち位置に共感し、彼の足跡に倣って歩もうと活動を始めたのだった。アブラムはハランという古代都市で生活していたが、安定した、しかし、人の思いに支配された都市での生活を捨て、わずかな親族だけを連れて神様に導かれるままに荒野に出て行った。アブラムは人間が形成してきた価値観の下での生活に違和感を覚え、神様を仰ぎつつ本来の人間らしい生き方を問い、求め、その導きに従って生きようと決意して実行したのである。比較的安定した教会信徒たちの世話よりも世の迷える羊の世話をすることに優先性を感じ、聖公会の司祭として当然と思える信徒の牧会に当

たる教会勤務を辞し、休職して見通しの立っていない飛騨の地に赴いた大郷師の姿はアブラムの旅立ちに重なる。

この本に大郷師の人生目覚めの出来事は沖縄愛楽園で起きたことが記されている。そこで出会った方々の生き様から、とりわけ自らハンセン病を患いながらもハンナ・リデル女史から沖縄の病友の支援・宣教のために派遣され、愛楽園創設に尽力された青木恵哉先生の働きと、その人となりに魂を揺り動かされたものと推察できる。社会の迫害に耐え、苦しみながらも導かれるままに神に従う道を歩まれた青木先生の姿にアブラムと同じ信仰者の原点を感じ取ったと思われる。その後、大郷師は平穏な日常に安住しがちな若者を、愛楽園だけでなく、フィルピン、ネパールといった日本とは事情の異なる厳しいフィールドに連れ出し、その中で必死に生きようとする人の姿に目を向けさせる働きに力を注いでいる。このプログラムを通して、あぶらむの会の活動を支える大きな柱となった元立大生達が育てられていることに着目したい。

人は平穏無事な環境下で「生の意識」に目覚めることが難しい。厳しい環境の中、苦しみを忍びながら必死に生きようとするとき、人にとってなくてはならない大事なものが何であるかに気付かされるものである。人というものはそのように造られているとさえ思われる。私自身、大郷師に連れて行かれた愛楽園で信仰の大変革が起きたと自覚している。三代目のクリスチャンとして幼少時から教会の中で育ってきた自分であったが、それまでの信仰は理性的に、合理的に受け止められる教理を基としたヒューマニズムの延長のようなものであり、いわば頭の中で構築された観念的なものであった。その信仰は愛楽園祈りの家教会の方々によって問われ、壊された。自らの意図をもって放棄したというよりは、むしろ剥奪されたという方が正しいが、この方々はこの世のあらゆる可能性から無縁とされた結果、それにしがみつくことをせず、頼るものは神様だけという純真な信仰に生きていることが伝わってきた。神により頼む生き方を頭で理解するのではなく、「悔い改めて福音を信じる生き方」を、全身全霊をもって実践しておられることが分かってきた。悔い改めるとは心を入れ替えて道徳性を高めることではなく、しがみ付いているこの世の価値観を手放すことなのだ。理念ではなく、恵みの内に存在を許された者達が導きを仰ぎつつ、周りの者と共に生きてゆく道へと大きく変化させられたのだ。青木先生は既に逝去されており、私はお目にかかったことはないが、青木先生の信仰はこの教会の中に息づいていた。社会から基本的人権さえも剥奪された中で生きて来られた方々を少しでも力付けたいと、ボランティアとして参加した自分であったが、目を覚まさせられ、力を戴いたのは他ならぬ私自身であったのだ。高等教育を受けた方々ではなかったが、この本に紹介されているＹ．Ｔ．オバアの「転んだら起きなさい。」や私が聞いたＳ．Ｋ．オバアの「人にはそれぞれ事情がある。むやみに批判しないがよい。」の言葉は人の心に深く響く。

耐えがたい苦労を背負い、懸命に生きそれを克服した方々がそれとなく教えてくれたことは、自分が置かれた状況から逃げてはいけないということ、その場で自分らしく生きようと立ち上がること、すると同じ思いをしている仲間の存在に気づかされ、そして、その仲間と共に歩み助け合うことで、生きる勇気と希望が与えられるということであったように思える。この姿勢はまさに、人が自分にとれない責任を取ろうとする傲慢、この世の価値観を捨て、神様の正しい導きの下に、赦されたものとして互いに助け合いながら共に生きる、共同体の

一人として生きなさいという主イエスの福音・宣教メーッセージと軌を一にする。

この姿勢はあぶらむの会が発足以来大事にしてきたスピリットに通じるものといえる。あぶらむの里にある人生の宿を訪れてくれた方々に誠実に向き合い、その思いを聴き、正面から問題に向き合いながら共に考えてきた歩みがこの本から伝わってくる。宿の主人である大郷師が直接正解を教示するというのではなく、問題整理を手伝う中で方向性が与えられ、訪問者を送り出してきた。このような他者との対応はこの本で紹介されている出会いの出来事の全てに一貫しているように見える。すべてがハッピーエンドではなかったが、元気すぎて社会規範をはみ出した腕白坊主たち、親の愛情を知らず、歪んだ心を持った家裁委託児童たちなど、大人を信頼できないでいた多くの若者たちが将来に希望を見出して旅立っていった。あぶらむの会の働きは十字架を表看板に出してこそいないが主イエスが示された「道・真理・命」をできるだけ教会用語を用いずに、伝えることをしてきた教会であると言えよう。

この本は、大郷師が人生の折々に出会った人との関わりが記されたものであるが、そこには紛れもなく主が共におられ、導きがあったと実感させられる内容が多い。信仰の先輩方だけでなく、そうでない方との関わりも多く書かれている。そこからは信仰者ではなくても、教養の高い知識人ではなくても、自らが置かれた場から逃げることなく、真剣に生きようとする人の中には聖霊の導きが及ぶことをひしひしと感じさせられる。この「CAMINO de ABRAM（あぶらむへの道）」の本は、今日の日本社会にあって、世の中で生き難くされている人々にとって良き学びの教材になると、また、今の時代にあって福音宣教に困難を感じている教会にとっても、求道者の方々の迎え方、接し方、そして伝え方のよきモデルとなると私は考えている。それ故に、今の生き方に満たされぬものを感じ、立ち止まって考えたいという人たちや、現代社会と教会の間の乖離の中で将来の教会活動を模索している方々には、今般、出版されたこの本を是非読んでいただきたいと願うものである。

「CAMINO de ABRAM　あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―」はあぶらむの会による自主出版となり、一般書店での販売はなされません。もし宜しければ周囲の方々にご案内いただければ、大きな喜びです。

本書の購入は以下のようにさせていただきます。

ご注文は、郵便振替（代金先払い）にてお願いいたします。

【振込先】　口座番号　００８００－４－８８０６５

加入者名　一般社団法人　あぶらむの会

■通信欄へご希望冊数をご記入ください。

郵送の場合、お振込金額は「2,000円×ご希望冊数」となります。

ご入金確認後、振込用紙にご記入いただいたご住所へ発送させていただきます。

尚、お問い合わせ及びご不明な点はメール・TEL・FAXにて当会へ直接ご連絡ください。

メールアドレス　abram@hidatakayama.ne.jp

ＴＥＬ・ＦＡＸ　０５７７－７２－４２１９

一般社団法人　あぶらむの会

代表　大郷　博

あぶらむの活動を支える国際ボランティア「ウーファー」達

「WWOOF」(ウーフ)という国際ボランティア団体がある。「World Wide Opportunities on Organic Farms」の略称である。「直面する地球環境問題等に関心を持ち、有機農業を実践する場での国際的広がりをもった出会い、交わりの機会」とでもいう長ったらしい意味になるが、要するにあぶらむの里のような場で主に世界各地から若者がやってきて生活を共にする。数週間、数ヶ月、1年を超える若者もいた。彼らボランティアを「ウーファー」とよび無償でここでの日々の作業を手伝ってくれる。彼らを受け入れる私たちホストはここでの生活をしっかりと支える。若者の力と彼らに食住を提供し時には彼らの抱える心の課題に寄り添うホスト、両者の持っているタレント(賜物(たまもの))の等価交換システムが「ウーフ」である。

ウーファーを受け入れて8年、これまでは圧倒的に海外からの若者達だったが、本年度はこのコロナ禍で完全に途絶えてしまった。家庭裁判所から預かった補導委託の少年達が知っている限りの英語を総動員してコミュニケーションをはかる光景がなつかしく思われる。

しかし、このコロナ禍の年、4人の日本人ウーファーがあぶらむを支えてくれた。そんな彼らの思いをお届けしたい。

いつの時代にあっても“自分探し”の旅に出る若者達に、心からのエールを送りたい。

私らしさ

福岡　陽菜

大学3年生になって自分の将来について本格的に考えなければならない時期になりました。その頃は自分のやりたいことは何か、何をするのが自分に向いているのかをいつも考えていました。自己分析やインターンシップなどやらなければならないことがたくさん出てきて、常に何かに追われているような感じがありました。考えても分からないこともたくさん出てきて、自分を改めて見直す時間が欲しいなと少しずつ思うようになっていました。

そんな時に初めて「休学」という選択肢を考えるようになりました。1年間自分の好きなことを出来る時間を作って、今考えても分からないことを明確にしてから、自分の将来の決断に望みたいと思いました。その手段として納得いくものを探していた時に見つけたのが「WWOOF」です。初めてみるその制度に、直感的にしっくりくるものを感じました。

WWOOFに行こうと決めたのは、かねてより興味のあった田舎での生活を学びたいと思ったから、そして新しい挑戦をしたいと思ったからです。私は昔から、誰かと面と向かって会話をすることをあまり得意としていませんでした。さらに新しい環境よりも、安定した環境に身をおいたほうが自分らしさを発揮できると思っていました。そんな私にとってWWOOFは、新しい環境で初対面の人と一緒に生活するということが条件であり、新たな挑戦でもありました。これならば、自分が分からないでいた「自分らしさ」のようなものを見つけられるのではないかと思いました。

実際にWWOOFに出発してみると、刺激的な毎日の連続でした。まずは移動です。少しでも支出を少なくしようと選んだスクーターでの移動は、慣れないうちはかなりハードでした。雨や風に打たれて凍えながら移動したこともあったし、眠気で意識が朦朧としながら移動したこともありました。しかしスクーターで移動していたおかげで、たくさんの出会いとも巡り会えました。「原付で広島から大学生が来ている」という噂を聞きつけて、たくさんの人が私に会いに来てくれました。

また、知り合って間もないホストさんと過ごす時間は私にとってかけがえのないものになりました。新しいお家に移動する度に、やはり緊張はします。でも私が思っていた以上に、移動中は緊張よりもワクワクが勝って、不安はほとんどなかったです。人との会話が苦手だと自分自身で勝手に決めつけていただけで、実はこんなに楽しいし、不安になることでもないんだと感じるようになりました。

WWOOFに出発してから色んな意味で度胸がついたと思います。まずは新しいことにも怯まない度胸。WWOOFを通しての生活は、本当に新しいこととの出会いばかりです。初めて草刈機を使ってみる、初めてコンバインに乗ってみる、初めて軽トラを運転してみる、初めてうどんを１人で打つ、初めての話題に意見を求められる等々。その１つ１つに不安や恐怖心を持って、挑戦できなければ成長できません。もしかしたら怪我をしてしまうかも、事故してしまうかも、場違いなことを言ってしまうかも、そんなことを考えるよりも前に好奇心が勝って何でもやりました。不思議なことに新しいことに挑戦すると、またすぐに新しいことに挑戦できる機会が巡ってきます。この自分の度胸に何度も助けられたと思います。

そして、自分が最も苦手としていた「言いにくいことも伝えること」。最近、本当の気持ちを相手に伝えられる度胸もついてきたと感じます。いつからか相手の気持ちを考えるがあまり、自分の本当に思っていることを伝えられないようになっていました。例えば本当はそうは思っていなくても、その場の空気感に合わせて意見したり、相手の求めているだろうなと思われる意見をあえて言ったりすることです。周りの意見や周りの気持ちを先読みして、自分の気持ちに目を向けない行動も多かったと思います。

しかしWWOOFを通しての生活では、そんなことは言っていられませんでした。初対面の人と生活するということは、生活に対しての考え方が違う方と生活をするということです。生活リズムも違えば、生活に対する常識・非常識の考え方も違います。そんな中で一緒に心地よく暮らせるようになるためには、お互いのことを深く理解し合わなければいけないと思っています。自分の良いところも、悪いところも見せられて初めて本当の家族のように接し合えると思っています。だからこそWWOOF期間中は自分の気持ちを正直に伝えることを意識しました。「今これ言ったら失礼に値するかな」とか「変な伝わり方をして誤解されたらどうしよう」などの不安は押し殺して、まずは思ったことを口に出してみました。すると私が今まで抱いていた不安は本当に無意味なものだったと感じるようになりました。人の気持ちはいくら考えても分からないし、それまでの関係ができていれば誤解されることもありません。相手のことを知りたければ、まずは自分自身を知ってもらわなければならないということを強く感じました。

自分の将来を決めるために出発したWWOOFでしたが、逆に自分の可能性を広げてくれ

た旅になりました。旅の間に経験したことが今の私の自信になり、活力になります。自分が何かに向かって必死になると必ず新しい出会いがあります。気づいたら自分の周りには素敵な人がたくさんいて、感謝することの連続です。これから先、まだまだ何が起きるか想像もつかないけれどWWOOFで出会ったかけがえのない人たちや思い出を胸に私らしく進んでいきたいと思います。

あぶらむの里には、2020年６月６日～23日の間の約２週間半滞在しました。短い期間でしたが、博さんや育さんは「学ぶ」ということを色々な形で教えてくれました。ご飯中の会話を通して知らなかったことに出会うこと、自ら勉強して調べることなど今の自分には無い知識を取り入れる機会が数多くありました。そして、今のままの自分ではなくもっと成長したいと思えるような学びをたくさん与えてくれました。私にとって本当に貴重な経験ができたと思っています。この場を借りて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

あぶらむにて

増田　善三郎

はじめまして。８月末から２週間あぶらむのでWWOOFさせていただいた増田善三郎と申します。光栄なことにこの度あぶらむ通信の原稿を書かせていただきました。拙文ではありますが読んでいただければ幸いです。

まず最初にWWOOFについて簡単に説明します。

WWOOFとはお金のやりとりが一切ない人と人との交流です。互いに持っているものを交換すると同時に、受け入れるhostと受け入れてもらうWWOOFerの豊かで親身なコミュニケーションを大切にしています。

ぼくはこのWWOOFを利用して全国各地を旅して回っています。

少し自分のことを書きます。ぼくは現在25歳です。大学を卒業した後、実家である北海道の牧場で２年間働きました。牧場の仕事は楽しく充実していました。しかしそのままずっと畜産業に従事し続けることには常になにか違和感を持っていました。自分が本当にしたいことは何か。自分の知らない世界を見てみたい。そう思い１度実家を離れ旅に出ました。

この旅にWWOOFを選択したのはWWOOFが有機農業という制限を設けていることとお金のやり取りがなかったためです。ぼくの有機農業のイメージは手間がかかり大変だというものでした。そして大変ながらそれを選択した人はきっと芯がしっかりしていると思い、その様な人の話を聞きたくなりました。

また、お金のやりとりがないということはhostとWWOOFerお互いの信頼、思いやりがないとうまくいかないということです。人と人とのつながりを大切にすることに魅力を感じました。これらの理由からWWOOFで旅をはじめました。そしてこの旅の中であぶらむにお世話になりました。

あぶらむでの生活では様々なことについて考えるきっかけを与えていただいたような気がします。その中でこの先ずっと心に留めておこうと思うことがありました。それは博さんの

これまで歩んできた旅路のバックボーンにある「人生は奉仕なり」という言葉の意味です。ぼくは最初、この言葉を人生において大切なことは人のために生きることである。と解釈しました。ですが、あぶらむにいるうちにそれは少し違うというかそれだけでは足りないと思うようになりました。

あぶらむの活動は人生の良き旅人づくりです。それはまさしく人生は奉仕なりを体現する活動です。ただどうしてあぶらむがこんなに人のために活動できるのだろうと疑問がありました。「人生は奉仕なり」がバックボーンにあるからというだけでは府に落ちませんでした。しかしあぶらむで生活して、博さんの話を聞いていくとその疑問はなくなりました。

毎日の様々な話は出来事は違えども共通点がありました。

それは話のほとんどが○○をしてもらった。○○に気づかされた。など人に支えられ導かれてきた、云わば奉仕されてきた話だったという点です。

ああ、そうか。博さんもたくさん奉仕されてきたんだ。そしてそのことをしっかりと忘れずに心に留めているんだ。そうだからか。ぼくの中で「人生は奉仕なり」という言葉の意味が少し変わりました。

人生は奉仕なりとは、人生は奉仕し、奉仕されること。であると。

ぼくは以前から生活が豊かになるにつれて心が貧しくなっているような感覚がありました。その理由の１つがこれなのかもしれません。多くの人が奉仕されているということを忘れてしまっているのです。

ぼくは自分の不遇を語るのではなく恵まれていることに目を向け、奉仕されている自分を認識してはじめて心から人のために生きていけるような気がしました。

今ぼくは将来牧場で働きながらあぶらむのような誰かのためになる活動もしたいと思っています。「人生は奉仕なり」をその軸の１つとして。

最後になりますが博さん育さんそしてあぶらむで出会った方々に感謝します。ありがとうございました。

コロナ退治にやってきたサンタクロース、煙突を伝ってやってきたのには驚いた!?

『第８期通常総会　開催報告』

第８期通常総会を2020年３月にあぶらむの里で開催いたしました。多くの方に参加いただき、心よりお礼申し上げます。

日　　時：2020年３月21日（土）16：00～17：30
場　　所：あぶらむの里　母屋
出 席 者：正会員14名
総会次第：
(1) 開会挨拶
(2) 議長・議事録署名人・書記の指名
(3) 定数の確認
(4) 議案
・役員の選任
再任役員　*敬称略
理事：大郷博(代表理事)、山田益男、西田邦昭、杉木峯夫、柴原薫、大郷育、川上美砂、西村正和
監事：川上詩朗
退任役員　*敬称略
理事：前田晃伸
・第８期活動報告
・第８期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計101,322,761円（流動資産51,907,046円　固定資産49,415,715円）
負債合計　　64,575円（預り金10,320円　短期借入金54,255円）
正味財産101,258,186円（うち当期正味財産増加額874,044円）
＜収支内訳＞
収入合計 14,373,412円（会費収入1,730,000円　寄付収入4,361,000円　研修収入7,260,038円　他）
支出合計 13,499,368円（減価償却費を除いた実質支出10,538,713円）
当期収支　　874,044円（減価償却費を除いた実質収支3,834,699円）
・第９期活動計画
・第９期予算(案)
＜収支予算案＞
収入合計 12,000,000円（会費収入1,500,000円　寄付収入2,000,000円　研修収入7,000,000円　他）
支出合計 15,400,000円（減価償却費を除いた実質支出12,000,000円）

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、
画面右メニュー　"2020年総会報告"をクリックしてください。

『第９期通常総会について』

第９期通常総会をあぶらむの里で開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2021年度会費納入いただいた会員各位に対して、１月下旬～２月上旬頃に正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2021年３月20日（土）16：00～（15：30～受付開始）
場所：あぶらむの里
議案：第１号議案　第９期活動報告、決算報告、監査報告
　　第２号議案　第10期活動計画、予算案

a Song with Bubu

あぶらむ非常勤スタッフ　静谷　英一

ブブは15年前、ここあぶらむの里にやって来た。同じ年、私はスタッフとしてあぶらむで働き始めた。

そう、ブブと私は「あぶらむ同期」なのだ。それから共にあぶらむでの日々を歩んできたが今年、ブブはあぶらむにたくさんの笑いと幸せな思い出を残し、その生涯を終えた。

ブブが死んだ後、私は「カホン」という南米出自の太鼓を作った。木で出来たそれを叩くと、思いがけず私の耳に以前聞いた、ある音が蘇った。

夜。

駐車場に車を停めてあぶらむへ向かうと、暗闇の奥から音が聞こえる。

「ボンボン、ボンボン」

それは私に気づいたブブが尻尾を振って、小屋の壁や床を叩く音だった。

私は次第に盛大さを増すその音の方へ歩みを進め、小屋の中にいるブブをゴニョゴニョとなでた。

今、私は太鼓を叩く。

その音の向こうに温もりと愛おしさを感じながら。

その一つ一つを胸に刻み込むようにして、私は何度も何度も、太鼓を叩く。

2020 コロナ年 あんなこと（あぶらむこの一年）

1月・元旦　うっすらと雪化粧、それがかえって寒々とした風景。
　・20日　あぶらむへの道（あぶらむ物語Ⅱ）脱稿。
2月・11日　軽く積雪、敷地内除雪車出動、この冬この時１回だけ。
　・日本で新型コロナウイルス感染拡大。
3月・新型コロナウイルス感染症、世界中に拡大。
　・21日　あぶらむの会 第８期定期総会（あぶらむの里にて）
　・24日　東京五輪延期決定。カエルの産卵例年より１ヶ月以上早い。
4月・10日　あぶらむ物語Ⅱ、最終校正を終え印刷開始。
　・11日　すぐ近くの四十八滝温泉、コロナで休業。
　・16日　田起こし。日本全土に新型コロナウイルス緊急事態宣言発令。
5月・２日　飛騨地で気温31℃となる。
　・４日　あぶらむへの道（あぶらむ物語Ⅱ）ネット販売開始。
　・17日　陸前高田における「希望のトランペット」中止。
　・24日　田植え
6月・５日　ファミリーホーム設立申請に基づき、県担当課より再度の現地視察。
　・10日　６月というのに福島で気温36℃、飛騨地も30℃超え。
　・17日　飛騨子ども相談センター（児童相談所）より里子のショートステイ有り。
　・21日　ブブ覚悟の家出、命日とする。
7月・７～９月の全ての行事、プログラム、予約キャンセル。
　・そんな中、12年前に家裁少年としてここで生活を共にしていた少年（はやもう30才）より電話有り。「あぶらむを出る時、おじさん、おばさんの前に顔を出せるような自分になったら連絡しようと思って生きてきた」という一言に二人して涙。
　・７日　九州熊本大水害、８日　飛騨地方にも大雨特別警報発令。飛騨地方南東部に大きな被害が出たが、あぶらむの里は軽微だった。
　・29日　県庁家庭支援課主催の研修会、あぶらむにて開催。
8月・１日　飛騨地方梅雨明け、８月末まで猛烈な暑さ続く。
9月・19～20日　稲刈り
10月・２～３日　脱穀、平年並み、やや減。
　・７日　JA 岐阜厚生連 高山看護専門学校 宿泊研修会。
　・10日　コロナに負けずに大人の学芸会 ― 持ち寄りコンサート ― 開催。
　・18日　あぶらむの里内でマツタケ17本ゲット!!　その夜マツタケパーティー開く。
11月・22～23日　落葉はき、越冬準備開始。
12月・21日　あぶらむ通信、一年間ご苦労さん会。

2021年の行事等は未定です。

寄付者（'19年12月16日～'20年12月13日）敬称略

愛知聖ルカ教会／安藝淳二／阿久津富男／雨宮寿子／新崎春子／㈱アリミノ　田尾兵二／池淵透／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤浩子／井本正樹／岩沢満／鵜川久・貴子／鵜川雅行／宇野徹／江崎忠男／岡登信義／小野田誠次・恵子／片山吉章・佳子／甲藤善彦・光江／川口基督教会／岸元忠義／岸本望／木ノ内三代治／木俣貞子／串間千秋／串間千里／熊沢洋子／倉石昇／小島正則／小堀浩子／小柳證／近藤好正／坂本吉弘／佐々木国夫／佐藤芳子／澤木実枝子／静谷英夫／忍嘉一／芝草忠／清水美保子／㈲清水自動車整備工場／下地道子／杉浦進／鈴木暁／鈴木育三／鈴木武次・保子／鈴木康仁／須田肇／聖公会沖縄福祉会聖マルコ保育園／園部千恵子／園部秀敏／高瀬章／高野優・永・航／橘政与志／棚橋忍・美江／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学宗教委員会／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／遠山章夫・秀子／富山聖マリア教会／豊永泰子／直井雅子／永井深雪／中島務／長縄年延・光子／中西和子／中村力・英子／中村芳枝／新家恵子／西川照子／西田邦昭／根本利子／萩尾信也・出穂／土師晴子／長谷川秀司／長谷川俊夫・牧子／畑井正春／畑野研太郎／速見直子／原川節子／比屋根るり子／藤井和彦／藤井真喜子／二神瑞晋／古川齊／古川秀昭・昭子／北條鎮雄／星野一朗／八月朔日浩／前田晃伸／前田容子／松平信久／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／宮城正男・正子／宮古聖ヤコブ教会／宮崎秀貴／宮嶋眞・公恵／宮本房江／宗像千代子／森毅／森松長明／諸岡研史・千佐子／八木克道／山田益男／山本鐘三／横浜聖クリストファー教会／Lehman幸子

物品寄付者（'19年12月16日～'20年12月13日）敬称略

㈱アリミノ　田尾兵二

出版費助成

渋谷聖ミカエル教会「ヒルダ・ミッシェル宣教支援基金」

会費納入者（'19年12月16日～'20年12月13日）敬称略

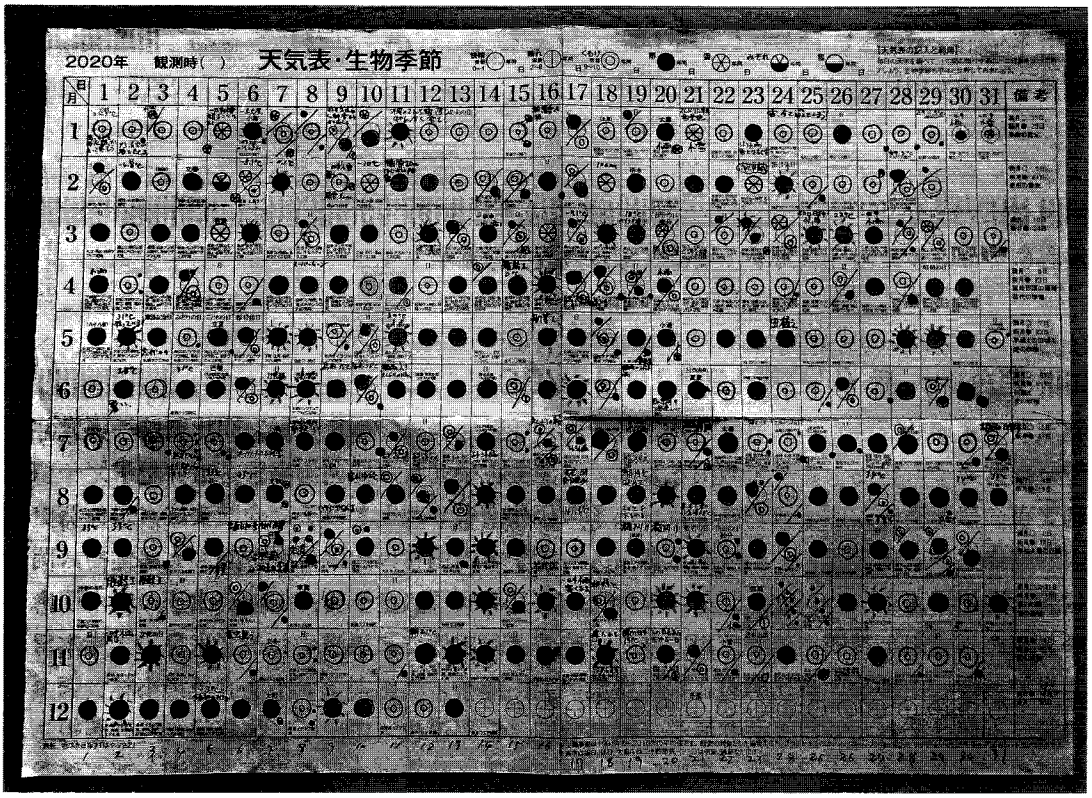
相沢牧人／赤井充也／赤松道子／秋本光一郎／朝野恵美子／朝比奈誼／朝比奈時子／穴井悦子／雨宮寿子／飯島千津子／飯田孝太郎／井澤夫佐子／石原博之・幸子／市井紀子／一柳典利・百／伊藤幸史／伊藤宣子／伊東日出子／伊藤浩子／井上るみ子／今関公雄／岩佐葵史子／岩崎海大／岩間光雄／上田敏明／鵜川久・貴子／内田孝・由美／宇野徹／大房健樹／岡登信義／小川卓／小野裕／加倉井誠／笠井正志／笠原雅子／金子眞／加納美津子／唐木田麻起子／河合昇／川上詩朗・美砂／川口弘二・暁子／河田健二／川満すわ子／木島出／岸本望／北昌子／金城由美子／倉辻明男／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／小池直子／小林賢三／小柳證／近藤弘／斉藤寛明／酒井厚子／櫻井智則／笹岡淳也・由紀子／佐藤耕一／佐藤純／佐藤哲典／佐藤芳子／座間幹生／沢野弥生／塩田純子／篠宮慶次／柴原薫／渋沢一郎／渋谷真理／島文子／清水幸平／下地道子／下畑幹／城下彰／菅原美穂子／杉浦進／杉村進／杉本良

平・和子／鈴木暁／鈴木正士・裕子／鈴木武次・保子／鈴木知子／鈴木信子／鈴木康仁／砂川博秋／聖母訪問会／仙敷正俊／園部千恵子／染谷孝章／高野優・永・航／高橋保／高濱友理江／田口清吾／竹中浩／竹林徑一／舘野裕之／田中孝子／俵里英子／丹安紀子／筑井宏子／陳品岡／寺谷恵美子／時高照子／友野博樹・和子／豊永泰子／永井深雪／長坂尚／中台信子／中野良春・えりこ／中村洋・久美子／中山美世子／長谷幸雄／西垣正子／西口晃／西口喜久枝／西村正和／野崎久子／野田修助・和子／萩尾出穂／羽柴加寿代／長谷川秀司／播磨裕治・あさ／日野忠市／福田桂・亜矢子・一太／藤井誠・ひろ子／古市進／古川秀昭・昭子／古沢昭夫／星野一朗／星野直子／前田晃伸／容子／前田晃・広世／前田眞智子／松井明子／松居勲／水谷小枝子／水谷勝／溝際庸介／三原一男・京子／宮城正男・正子／宮崎秀貴／宮脇加代子／宗像千代子／室岡恵／衆樹歩実／八木克道／矢後和彦・正子／山内寿美子／山口泰生／山崎美貴子／山田益男／湯田啓一／吉田太／吉野康／若園紘志／無名氏１名

新規会員（'19年12月16日～'20年12月13日）敬称略

石原博之・幸子／杉浦進・恵美／竹林徑一／舘野裕之／水谷勝

今年（2020年）の天気表



冬、雪少なく、7月を除き雨も少なし。